

開いた心がないと、 新しい街つていけるのは できないんですよ。

鈴木健二さん

アナウンサー、文筆家をはじめとして幅広い分野に活躍中の鈴木健二さん。今回(5月)講演会のために来熊中の鈴木さんにインタビュー、熊本についてのいろいろなお話を伺いました。

「以前、熊本にいらしゃったことがあったんですけど…」

ええ。NHKに入って最初の勤務地が熊本でしたね。昭和二十七年から三年ほどおりました。初めて熊本に来たのはちょうど今頃の季節でした。私は江戸っ子ですけど、高校・大学と東北で過ごしたんですよ。それが熊本に来たんですよ。突然、カンカラカンに明るいんですよ、熊本は。これが同じ日

本がなくて、たいへんとまどったものです。

熊本の街並み

「その頃と比べて、熊本の街並みはどうですか。」

お城から上通り、下通りですね。このへんの地図は昔とあまり変わっていませんね。よその街は、昔の繁華街とは別に今の街ができていくところが多いのですが、熊本の場合、もともとの繁華街はそのままヨコに張り出してくるっていう形になってますよね。とても珍しい街だと思います。

また、ここ最近急激に伸びつつある街のようにも思えます。どうも熊本の街は一時成長が止まっていた時期がある

ったのではないかと気がするんですよ。それを一気に取り戻しつつある。ヨソの街を観ながらいい方向にね。

郷土史と女性史

「熊本でいちばん印象に残っていることは？」

そうですね。昭和二十八年の水害です。もの凄い水と泥でした。もう道路の向こうが見えないくらい。そして泥がなくなると、目も開けられないほどのホコリでしょう。そんな中を必死で取材しましたね。そして、いろいろな取材をしていく中で「あー熊本は非常に伝統のある街なんだなって思ったんです。それから熊本の歴史についていろいろ調べましたよ。

「熊本では、現在の熊本の文化や思想のもととなっている『肥後学』を研究しようとする動きが活発になっていますが…」

そうですね。実は私も郷土史にはたいへん興味があるんです。というのも、日本の歴史を解明するために必要なのが女性史と郷土史だと思っているからなんです。いわゆる政治を中心とした通史からは、日本の歴史をもうこれ以上解明できないんじゃないかと思うんです。部分的なものをいじると

けて…。むしろ郷土史ですね。郷土史と女性史がどう生きてきたか、そういう歴史です。そういった点から見ると、熊本は装飾古墳でわかるように、他の所に無いものがあるはずなんです。だから、熊本の歴史を丹念に追求することは、単に熊本だけでなく日本の歴史の新しい解明にも非常に役立つ時がくるような気がしますね。

「中にあること、そういうことにはなかなか気づかないですね。」

地元にいると意外と郷土のことがわからないということもありますね。ですから外の人が入ってみるのも必要だと思います。そして、そうした人たちの考えを受け入れることもまた大切ではないでしょうか。そういう寛容さみたいなものは「文化」を考える上でもいえることだと思います。文化という中央から何か持ってきてそれをごく限られた少数の人が見るんだみたいなところで満足している面がありますけど、違うんですよ。新しい喫茶店を作ろうという若者が三人いたら、街は変わるでしょうね。それが文化なんです。日本の今までの文化が床の間に置いてみる文化ばかりだったでしょう。ところが今は、文化が生活の中に入ってきていますからね。

モッコスとワサモン

「文化は『守る』というイメージが強いんですが…」

いいものは残せばいいし、新しいものはどんどん取り入れればいいですよね。つくる文化もあるのですから。そういう点では、熊本の方たちは、元来、自分を譲らないモッコスといへん進歩的な…。

ワサモンですね。

そう、ワサモン。そのモッコスとワサモンという持ち味を生かしながら、文化をつくってほしい。

「県民一人一人の意識だけでもっともっと、くまもとが面白くなる」ということでしょうか。

そうですね。私は熊本県はたいへん可能性を持った県だと思います。それだけの素材がある所なんです。細川さんが県知事としてたいへん注目されている存在というのも、知事自身の魅力もさることながら、県をそれ自体の中に魅力があるからなんです。そういう意味で熊本はどこよりも可能性と面白さを持った県だと思います。今後がますます楽しみです。

